

新文明

十二月

昭和二十七年十一月一日發行(毎月一回一日發行)第一卷第十二号
日本國有鐵道特別承認雜誌第二〇四八號
昭和二十六年十月三日第三種郵便物認可



木

昭和二十七年十二月一日發行(毎月一回一日發行)第二卷第十二号
昭和二十六年十月三日第三種郵便物認可

*Les violons
de l'automne
Blessent mon*



SHINJUKU TOKYO
WISTARIA

TEL 37) 3027-1509

特
地方
売
価

六
十
三
円

お店の繁栄に
Mazda
マツダ号

東京都中央区八丁堀一ノ四
電話 (55) 4431・4432

マツダ三輪トラック
東京マツダ販売株式会社

明石印刷株式会社



雙十節

田中克己

僕たちは京漢線の小驛を警備してゐた

秋日和で空はあくまで澄みわたつてゐた

午後、僕は城内へ見物に行つた

いつもの露店市では色々の菓子を買つてゐた

それがひどく僕を喜ばせた

兵隊には食欲しかないのだから

「言語道断ぢや。僕は、二度と行く氣はしませぬぞ」

急に忿瀆に堪へぬものの如く、佐五は、鋭く云ひはなつた。

龜代は、おどろいて、佐五を瞬時睨めたが、すぐまぶたを伏せた。

「正明殿を、何故あのやうに悪し様に申されるのか、腑に落ちぬどころか、真逆くさい限りぢや。血のかよつた身寄りでは御座いませぬか。長子であり乍ら親を棄てて出奔したばかりか國の謀叛人になつて家名を傷つける横道者だ、とけなしつけましたぞ。宮曾根など、いそ非業の死にでも遇ふた方がよいなどと……。僕は二度も三度も江戸へ出て、正明殿の人品を知つて居るだけに、餘計我慢しかねて、席を蹴つて歸りましたが……。正明殿の志を本當に知つて居るのは、數ある親族中笹原家だけとは、實以てなさないでは御座いませぬか」

傍の龜代が、三井家から來てゐるといふ氣がねも、佐五の心に、それ程の逡巡を興へなかつたと見える。

しかし、治兵衛は、圍爐裏の炭を、遠く眺めたきり、黙々として端座してゐた。

佐五が、いよいよ昂奮して、親族たちの暗愚不人情をならべたて出すと、治兵衛は、かへつて佐五のその眞率な態度に、かすかな不快さと煩しさをおぼえてゐた。幾年もの年月骨身にしみてゐる親戚の白眼視なのである。その痛みを今更、針でつつくやうに喚かれることは——いや、治兵衛自身の心に生じてゐる矛盾が、苦しければ苦しいだけに、佐五の言葉が、鞭になるのだつた。

佐五が、もうすこし罵倒をつつけてゐたら、治兵衛は、不意に、に

家を滅茶々に破壊、あるひは、どこかの國侍が茶店で憩ふてゐると、風のやうに出現して、その首級を取つて河に投じた事實もある。

成田の先の飯岡村の平兵衛といふのは、近郷きつての富豪だが、天狗黨から先頃頼む仔細があるから潮來まで出向くやうに、と一書の使ひが來たので、仰天した平兵衛は、しかし、弱味をみせまいと、用があれば當方へ參られる様、と返書したから、今日にも天狗が襲ふに相違ない、等。

八郎は、場合によつては平兵衛の難を救ふつもりで、飯岡へいそいだ。だが、平兵衛は、かへつて、八郎を天狗黨の一人と疑つて面會さへもしようとしなかつた。やむなく立去つて、同志村上俊五郎が宿してゐる神崎村へ、薄暮に着いた。村龍子俊五郎が寄宿してゐるのは、醫生石坂宗順の家であつた。宗順は、元彦根の藩士であつたが、十五歳で朋友一兩輩を殺害して、自分も割腹したが、すぐ手當をうけたので生命をとりとめて、國を立退いた經歷の持主であつた。村上と兄弟の契りをむすんでゐた。

一夜鯨飲で明かして意氣投合した三人は、翌二月三日、つれ立つて潮來に向つた。

期せずして、三人とも總髮で、馬袴を着し、實戦用の長刀を横たへてゐたので、周圍の眼が悉く恐怖で凍んだのも無理はなかつた。

佐原に入ると、從來の人々は、三人を見て、怯え立つて逃げかくれました。天狗黨だと思ひちがへたのである。豫想以上の天狗黨の暴威に、八郎は、一種の敬意さへ抱いた。

がにがしく制したであらう。この折、帳場の方が騒しくなつた。五六人の高聲が入り交つて、だんだん烈しくなるのが、はつきりつたはつて來た。立ち飲みに來た船頭連中の争ひに相違なかつた。

「は、ん、僕がこの家に來ると、待つてゐたとばかり喧嘩がはじまる。まアまアとなだめて、機嫌なほしに一杯つつ飲ませてやる。あいつらは、喧嘩する毎に得をして、儲からんのは肝煎役ぢやて——」

笑つて腰を上げると、佐五は、いそいで出て行つた。

ふたたび、この居間だけの、冷たい空気がひそと沈んだ。

治兵衛は、前よりも一層暗い心を抱いてゐた。龜代も、——龜代は自分の生家である三井家との不和に、胸をふさいでしまつた。

いつか、外は、吹雪になつたらしく、庭の樹々を唸らせて過ぎる強い音響も、ただ鋭く切るやうなひといるだつた。

燈心が短くなつたか、灯影が、急にあかるく、大きくまばたきした。萬延元年は、蒼黄と暮れた。

(三)

明けて辛酉——

正月早々江戸府内にまで、天狗廻狀と上封にしるした檄がまき散らされた。

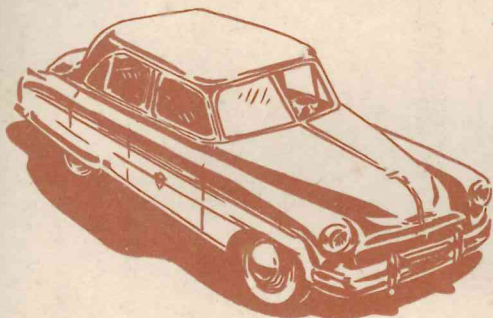
早々相廻書付之事

昨年來りも續く米穀高直に相成り、百姓一同困窮仕候、その根元を詳に推尋仕候處、西洋の諸蕃共日本へ押渡り無體に交易通商相願ひ



國際自動車株式會社

取締役社長 波多野元二
東京都港区溜池町一丁目二番地
電話・赤坂(48)代表6801~8



◀營業品目▶

ハ イ ヤ ー
タ ク シ ー
觀 光 バ ス
外人セダンサービス
官 衙 バ ス
外 車 販 賣
ガ ソ リ 販 賣

編輯後記

▽今月號も記事が多く、定價を超過した。十一月號が豫期した通り好評だったので、氣を好くして頑張ったわけである。特に「東南アジア親善使節」として數ヶ月各國を歴訪した稻垣平太郎氏に乞ふて、その「旅行記」を戴いた。何しる繁忙の氏に執筆してもらふことは並大抵のことでないので、特



傳統を誇る
最高の品質
信用のおける
このマーク



特許電氣滲透法応用芯

地球鉛筆

に本號は締切をのばし、頁數を増大し本號から連載させてもらふ事にした。御厚意をありがたく思ふ。是非愛讀者皆様の御一讀を得たい。
▽本號で昭和二十七年を送るとになる。來春から、企畫を新にして折角好評のところを押してゆきたい。もう、原稿も整備されてゐて印刷所に廻した。年内は、また忙しく暮すわけである。

▽十一月號は、全く好評であった。追加注文も來たし、新聞廣告による注文も創刊以來のことであつたのは、うれしかつた。

▽表紙は鈴木信太郎畫伯につづけて描いてもらった。畫伯も想をこらして、いゝものをつづけて描く——といつてみられるので、皆様と共に月々の表紙を楽しみたい。

▽それから、近來、本誌に對して投稿が多くなりました。ペーヂ數が制約されてゐますので、原稿の長いものや内容によつては登載することが出来ないものも少くはありませぬ。尙、御投稿に對してその都度御返送したり、御返事すべきであります。それも致し兼ねる場合が多く、何卒悪しからず御諒承下さいますやうお願いいたしておきます。

和木清三郎

創刊號當時お申込戴いた方は、「前金切」となりましたから、何卒おついでの節、お拂込み下さい。

銅・洋白
アルミニウム

株式会社

板・線・棒
パイプ

社長 山田 廣次

白銅商店

東京都中央区八丁堀三ノ七
電話・築地(55)代五〇一―四五番
電話・築地(55)五三〇―三四番

一般壓延鋼材
特殊鋼

株式會社 兼 商店

東京都中央区八丁堀四ノ五
電話・築地(55)五二二―八一―一五
五二二―八一―一五
四三二―八一―一五
五四二―八一―一五
三八八―八一―一五

(人同明文新)

金原賢之助
高木壽一
町田義一郎
今泉孝太郎
今宮新
富田正文
和木清三郎

新文明 第二卷・第十二号

昭和二十七年十一月二十日印刷
昭和二十七年十二月一日發行

本誌購読料

一部 定價六十圓
郵税 八圓
一ヶ年分 七圓
半ヶ年分 三百五十圓
春秋二期増頁特別號
を刊行する豫定

編集兼 和木清三郎
東京都目黒區自由ヶ丘二〇五

印刷所 東京都中央區入船町一ノ八
明石印刷株式會社

印刷者 東京都中央區入船町一ノ八
小林光次

發行所 東京都目黒區自由ヶ丘二〇五
新文明 社

電話(在居)五二二七番
振替東京七七四八番
(和木清三郎宛)